写真

森田カオル

ケータイから、彼のデータを消した。データフォルダから、メールの履歴と、写真も消した。

彼からのプレゼントは、すでに処分し終わっていた。

さっき、彼のアパートへ行ってみた。ドアノブに、電気や水道の開通を知らせるための書類が吊るされていた。

お互い行き来した部屋。

今までは、独りでいる時も、それは彼の存在に対する不在だった。

今は、「無」しかない。

彼と訪れた場所も、その「無」を証明する場所でしかなくなった。

小さなアルバムを、戸棚から取り出した。

彼の写真。彼が見た光景の写っている写真。

彼を見ている私の面影が映っている写真。

同じ棚にしまってあった、手動式のシュレッダー。電動式だと危ないから、と、彼が買ってくれたもの。そこへ、写真を一枚ずつ差し込んで、ハンドルを回す。

がりり。

彼が断裁される。

私が過ごしてきた時間が、わたしの心が、粉砕される。

がりがりがりが